

都市の中の都市、都市の顔であり、都市の象徴的なハイライト空間は「盛り場」である。盛り場は、人間の欲求（物・食・酔・遊・性欲）を充足する施設が集中する地域であるが故に、人びとが数多く集まる。東京の盛り場といえば、誰もが銀座、新宿、渋谷などを思い浮かべるであろう。立地施設の違いに着目すれば、盛り場は、商店街、飲み屋街、娯楽街、ピンク街などに区分される。このうち、商店街は昼間の女性客を中心顧客とする、いわば表の昼間の盛り場である。ただし、わが国の商店街の多くは、老舗商店が減ってシャッター通りと化すなど、盛り場としての魅力を喪失して既に久しい。

一方、後三者の盛り場は夜間の両性客を中心顧客とし、「歓楽街」、「夜の盛り場」、「ネオン街」などと総称される。歓楽街の重要性については、①

あくまで都心立地を志向（他の盛り場施設は郊外立地志向も顕著）、②都市の魅力としての猥雑さと変化の激しさ、③郷土料理や地酒を味わえる飲食文化の拠点、④サロンの役割、音楽・芸能の公演などの文化発信、⑤日本特有の夜の盛り場である（飲酒施設の集中地区は世界的にみると珍しい）ことなど、数多い。しかしながら、歓楽街については、負のイメージが強く、これまで公式の場における積極的言及や振興に関する議論が極めて少ない。

都市社会学では、盛り場は「第三空間」として言及されてきた。家庭や近隣社会の「第一空間」、職場社会や学校の「第二空間」に対し、家族、知人、身分から離れた自由な癒しの空間が第三空間である。近年、アメリカの社会学者・オールデンバーグの訳書（『サードプレイス』みすず書房）が出版され、わが国でもカタカナ書きのサードプレイスが注目されている。同書の副題は「コミュニティの核に

## 都市論・オムニバスエッセー⑤ シティ・イン・シティ



寺谷 亮司 (てらや りょうじ)

1960年小樽市手宮生まれ。札幌南高卒、東北大学理学研究科博士後期課程（地理学教室）修了。理学博士（東北大学）。北海道大学文学部助手、愛媛大学法文学部教授などを経て、現在、愛媛大学社会共創学部教授・地域創成研究センター長。専門は、北海道や東・南部アフリカ都市、世界の酒・盛り場、まちづくりの研究など。

間である。近年、アメリカの社会学者・オールデンバーグの訳書（『サードプレイス』みすず書房）が出版され、わが国でもカタカナ書きのサードプレイスが注目されている。同書の副題は「コミュニティの核に

なる「とびきり居心地よい場所」である。オールデンバーグは、市民が気軽に立ち寄ってゆっくり過ごすイギリスのパブやフランスのカフェとは異なり、マクドナルドなどのアメリカの飲食店が市民の憩いと交流の場になっていないことを痛烈に批判している。

わが国の都市政策も、上記の例でいえばアメリカ的であり、住宅（第一空間）とオフィス（第二空間）の整備に偏重し、再開発事業では古い飲み屋横丁を壊し、味気ない再開発ビルを建てる「スクラップ・ビルド」が多い。市民生活や生活文化において、日本人は住宅とオフィスを往復するのみで、サードプレイスを重視する慣習をもたない。

かつての井戸端や銭湯、

私の好きな「吉田類の酒場放浪記」や「世界入りにくい居酒屋」に登場する酒場などのサードプレイスは、地域の老若男女が集まって楽しみくつろぎ、コミュニティの形成と団結、都市や市民生活への関心の喚起や議論、情報交流や互助活動がみられるなど、多くの好ましい機能を有する。パリのカフェは、芸術や文学の舞台となってきた。

ススキノなどの歓楽街やサードプレイスの創造・整備が、都市文化の醸成やまちづくり活動に直結し、都市の魅力を高めることは疑い得ない。国もやっとこの重要性に気づいたのか、今年6月には「文化芸術振興基本法」が改正され、食文化は生活文化に加えられ、その振興を図るため「地方文化芸術推進計画」を立案することが市町村の努力義務事項と定められた。